

## 道元と如浄(三)

伊 東 洋 一

### 二 正法眼藏身心學道(承前)

#### (一)

さて『身心學道』の本文に立ち返ると、「発菩提心」に関してはそこでは大要次のように述べられている。発菩提心は、生死において、涅槃において、生死涅槃を外にしても可能である。それはそのような場所に妨げられない。環境によるのでも知恵によるのでもなく、ただ菩提心がおこるのであり、菩提心を発するのである。また発菩提心は有・無、善・悪でもなく、無記でもない。報土によって縁起するのでないから、天上界・人間界に菩提心がおこらないと決まったものでもない。それは時節とともに菩提心を発するのである。依報土に無関係であるから、法界ごとくが菩提心を発するのである。それは依報土を転じて菩提心とするのではない。ともに一本の手を突き出すのであり、自ら一本の手を突き出すのであって、依報土と発菩提心が能所の関係にあるのではない。発菩提心はあらゆる世界に遍在している。したがって地獄・餓鬼・畜生・修羅等のなかでも発菩提心するのである。

## 原文

發菩提心<sup>へ</sup>者、あるいは生死にしてこれをうることにあり、あるいは涅槃にしてこれをうることにあり、あるいは生死涅槃のほかにしてこれをうることにあり。ところをまつにあらざれども、發心のところにさへられざるあり。境發<sup>きやうはつ</sup>にあらず、智發<sup>ちはつ</sup>にあらず、菩提心發なり、發菩提心なり。發菩提心は、有にあらず無にあらず、善にあらず惡にあらず、無記にあらず、報地によりて緣起するにあらず。天有情はさだめてうべからざるにあらず、ただまきに時節とともに發菩提心するなり。依<sup>よ</sup>にかかはらざるがゆゑに。發菩提心の正當恁麼時には、法界ごとく發菩提心なり。依を轉するに相似なりといへども、依にしらるるにあらず。共出<sup>きうしゅつ</sup>一雙手<sup>いっしやうしゅ</sup>なり、自出<sup>じしゅつ</sup>一雙手<sup>いっしやうしゅ</sup>なり、異類<sup>いるるる</sup>中行<sup>ちやうぎやう</sup>なり。地獄・餓鬼・畜生・修羅等のなかにしても發菩提心するなり。<sup>(1)</sup>

『私記』はこれを「發心の全機現なり、ゆゑに境智にかかはらずして發する菩提心なり<sup>(2)</sup>」と註しておることからいっても、要するに心學道とは發菩提心であり、一切時一切處の發菩提心の全機現成の消息を説いていると見てよいのではあるまいか。

心學道はまた「赤心片片」である。「赤心」とは『御抄』によれば、「あらはなる心なり、解脱の心地也<sup>(3)</sup>」とある。本文の大意は、赤心は一念一念(片片)が皆あらわな心で、一念二念(一片兩片)と並ぶのではない。あたかも蓮葉は団々として鏡のようにまろく、菱<sup>ひし</sup>の角は尖尖として錐<sup>きり</sup>のようにとがっておるようなもので、しかも鏡に似ている錐に似ているからといって、それぞれにそのまま赤心片片である、ということにならう。

## 原文

赤心片片といふは、片片なるはみな赤心なり。一片兩片にあらず、片片なるなり。荷葉團團トクシナルコト、團二、似レ鏡ニ、菱角尖尖トシテナルコト、尖二、似レ錐ニ。かがみににたりといふとも片片なり、錐ににたりといふとも片片なり。

『御抄』は赤心を先の言葉に続けて「心の無邊際なる道理、一法究盡の理を如此云也(三)」とし、「荷葉團團(四)」を「荷葉は、團々としてまろにて法界を盡し、菱角は尖々としてするどくして法界を盡す心地也、不交餘法心地也(五)」とする。そうするとここでも一念一念が独立無伴、一法究尽で余法（余物）のない消息といつてよいであろう。

心学道は更に「古仏心」とされる。本文は、僧に問われて答えた大証國師の古仏心とは牆壁瓦礫(六)ということを受け、それ故に古仏心は牆壁瓦礫ではない、牆壁瓦礫が古仏心ではない、というのであろう。

## 原文

古佛心といふは、むかし僧ありて大證國師にとふ、「いかにあらんかこれ古佛心。」ときに國師いはく、「牆壁瓦礫シヤウヘキダク」。

しかあればしるべし、古佛心は牆壁瓦礫にあらず、牆壁瓦礫を古佛心といふにあらず。古佛心それかくのごとく學するなり(七)。

その理由を『御抄』は次のように説明する。「牆壁瓦礫の究盡する時、古佛心といはじ、古佛心の獨立する時牆壁瓦礫といはじと云心地也、是則一法獨立の姿なり(八)。」と。そうであればここでも一法究尽、全機現成の消息といつてよいであろう。

心学道は最後に「平常心」とされる。本文の意味をとると、

平常心とは、此の世界彼の世界といわず、あらゆる世界が平常心ということである。昔日はこの平常心から去り、今日はこの平常心から来ている、しかもその出来は漫天尽地（天地全体）の去来である。したがって平常心は平常心のなかで開閉している。つまりそこでは無数の門戸が一斉に開閉するのである。だから平常なのである。したがって蓋天蓋地（漫天尽地、平常心）は覚えな言葉を聞くようで、くしゃみの一声が噴き出すようである。それは語といえば語、心とすれば心、法といえ法といつてよい。それは人の寿命やその営みの生滅とともに生滅するものであるから、凡夫の状態を脱して成仏するまでは一向に分らない。しかしそれにも拘らず、発心すればかならず菩提の道にすすむことができる。すでに菩提心が起っているのである。少しも不審に思うことはない。不審に思うその心がなんぞ図らん平常心なのである。

### 原文

平常心といふは、此界他界といはず、平常心なり。昔日はこのところよりさり、今日はこのところよりきたる。さるときは漫天さり、きたるときは盡地きたる。これ平常心なり。平常心この屋裏に開門す、千門萬戸一時開閉なるゆゑに平常なり。いまこの蓋天蓋地は、おぼえざることばのごとし、噴地の一撃のごとし。語等なり、心等なり、法等なり。壽行生滅の刹那に生滅するあれども、最後身よりさきはかつてしらず。しらざれども、發心すればかならず菩提の道にすすむなり。すでにこのところあり、さらにあやしむべきにあらず。すでにあやしむことあり、すなはち平常なり。

要するにここでも「平常心」の漫天尽地、蓋天蓋地、全時間（去来）に亙る普遍性を述べていると見られる。

こうしてみれば、心の種々相としての「発菩提心」、「赤心片片」、「古仏心」、「平常心」は心の普遍性、一法究尽、全機現成を問題としていっているといつてよく、心学道とはこのような問題の体得ということになろう。

なお「発菩提心」に関しては寛元二年（一二四四）、つまり越前に移って二年目の二月十四日示衆の奥付のある『發無上心』の巻に数多くとり上げられ、同じ日付をもつ巻は卷名とされている。「古仏心」も巻名とされて寛元元年（一二四三）四月に六波羅蜜寺における示衆とされており、翌寛元二年の『發無上心』でもとり上げられている。これらはいずれも『身心學道』以後の説示であり、それぞれの個所で検討することにする。「赤心片片」及び「平常心」は『身心學道』以前にもあらわれるので、ここではこれらに關してふり返つて見る必要がある。先ず「赤心片片」は「仁治二年辛丑夏安居日、これをかきて慧達禪人にさづく。」<sup>(10)</sup>という奥付のある『法華轉法華』の巻に見える。その個所は次の通りである。

いはゆる法華轉といふは、心迷なり。心迷は、すなはち法華轉なり。しかあればすなはち、心迷は法華に轉ぜらるるなり。その宗趣は、心迷たとひ萬象なりとも、如是相は法華に轉ぜらるるなり。この轉ぜらるる、よろこぶべきにあらず、まつべきにあらず。うるにあらず、きたるにあらず。しかあれども、法華轉はすなはち無二亦無三なり。唯<sup>ゆ</sup>有一佛乘にてあれば、如是相の法華にてあれば、能轉所轉といふとも、一佛乘なり、一大事なり。唯以の赤心片片なるのみなり。<sup>(11)</sup>

これは大唐国広南東路、韶州曹谿山寶林寺大鑑禪師が法達という僧に示した「心迷<sup>ハ</sup>法華<sup>ニ</sup>轉<sup>ズ</sup>心悟<sup>レ</sup>轉<sup>メ</sup>法華<sup>ニ</sup>」。

「」を受けてのものの一節で、その大意をとれば、いわゆる法華転とは心迷であり、心迷はとりもなおさず法華転である。そうであれば、心迷というのは法華に転ぜられることである。その趣旨は、心迷によってたとい万象が現象するとしても、そのあるがままの姿（如是相）は法華に転ぜられているのである。この転ぜられるということはよろこぶべきことでも、期待すべきことでも、得ることでも、来ることでもない。そうであれば法華転は二でもなく、三でもなく、ただ一仏乗があるだけ（唯一佛乗）である。そしてありのままの姿の法華であるから、転ずるも転ぜられるもただ一仏乗であり、ただ一大事であり、ただ赤心の片片であるだけである、と解される。そうしてみると「赤心片片」はここでは法華転としてとり上げられ、その法華転は「唯一佛乗」とされるのであるから、「赤心片片」が一片が独立無伴、一法究尽とされたことと同じで、赤心の全機現成をここでは「唯有」としていることであろう。「赤心片片」は更に『法華轉法華』と同年十月の奥付のある『行佛威儀』にも見える。その個所は次の通りである。

しるべし、三世諸佛は火焰の說法を立地聽法して諸佛なり。一道の化儀、たどるべきにあらず。たどらんとするに、**箭鋒相拄**せり。火焰は決定して三世諸佛のために說法す。赤心片片として**鐵樹華開**世界香なるなり。<sup>(三)</sup>

この個所は、雪峰山の真覺大師の「三世諸佛、在**火焰裏**、轉**大法輪**。」（三世もろもろの仏たちは、火焰の中にあって大いなる法輪を転ずる）と玄沙山の宗一大師の「火焰爲**三世諸佛**、說法、三世諸佛立地聽。」（火焰が三世諸仏のために說法するときには、三世の諸仏は露地に立って聴く）の拈提中、特に後者に関して述べる個所に出てくるもので、それは、知られるように、三世の諸仏とは火焰の說法を地に立って聴く仏たちである。すなわちそれは、説くもの・聴く者・説かれるもの（法）それぞれ他に対する一つと考えてはならない。そのように考えるとしても、三

世の諸仏と火焰とは箭と鋒とが尖端相触れるようなもので、そこに間隙を見ない。火焰は疑いもなく三世の諸仏のために説法する。その説法の姿は純一無雜で、あたかも鉄の木に花開いて世界に香るがごとくである、と解することができる。『思想大系』では、「其説法の相は『赤心片片として』何物も雜り物はなく、山は山だけ、川は川だけ、天は高く、地は低く、只だ其だけ、純粹な實相として、説き盡してゐる」<sup>(19)</sup>と註している。

「平常心」は『神通』の卷（仁治二年辛丑十一月十六日示衆）に見える。その個所は次の通りである。

いはゆる四果は、受持四句偈なり。受持四句偈といふは、一切有無諸法におきて、眼耳鼻舌各各不貪染なるなり。不貪染は不染汙なり。不染汙といふは、平常心なり、吾常於此切なり。<sup>(19)</sup>

これは百丈大智禪師の「眼耳鼻舌、各各不貪染、一切有無諸法、是名受持四句偈、亦名四果。……」（眼・耳・鼻・舌において、一切の有形無形のを貪り執することなきこと、これを四句の偈をまもるといい、また四果という。……）を受けてのもので、その意は、四果とは四句の偈を受持することだという。四句の偈を受持するというのは、すべて有形無形のものに對して、その眼も耳も鼻も舌もいづれにおいても貪り執しないことである。貪り執することがないから汚れに染まないのである。汚れに染まないのでが平常心というものであり、つねにそれを大切にするのである、と解せられる。このように見ると、『身心學道』にあらわれる「赤心片片」並びに「平常心」はそれ以前の諸巻に見えるものとその意味において特に変化があるうとは思われないのである。

次いで身學道に移る。身學道は次の言葉を以て始まる。

身學道といふは、身にて學道するなり、赤肉團の學道なり。身は學道よりきたり、學道よりきたれるはともに身なり。<sup>(15)</sup>

身學道とは身にて學道する、とあつて、ここでも一見身を手段としての學道ととれるが、諸註釈によってみるとそうではない。例えば『思想大系』は、「『學道より来る』と云ふは、この身は學道の身であり、身は即ち學道と一である」と云ふ意味である。學道と身とを對立存在とは見ないで、學道する身として、其處に道と一如させた身體が貴重なのである<sup>(16)</sup>という。そうしてみると『身心學道』の最初に當つて『啓迪』が「……身學道とは身を學する、心學道とは心それを學するのだ<sup>(17)</sup>」と解したことがここでも確められる。

さて身學道は「眞實人体」として展開し、それは「尽十方界是箇眞實人体」と「生死去來眞實人体」となり、最後に生死去來の「全機現」を以て終っている。すなわち、身が學道から來たり、學道からきてゐるのはすべて身であるとすれば、そこから「盡十方界是箇眞實人體なり、生死去來眞實人體なり<sup>(18)</sup>」となる。十方世界のことごとくがまさに一個の眞實人体であり、生死去來のすがたがそのまま眞實人体である。そしてその人体が眞實であるのは、尽十方世界に通じ、生死去來に通ずると共に、この身体をもつて「十惡をはなれ、八戒をたち、三寶に歸依して捨家出家する、眞實の學道<sup>(19)</sup>」でもあるからである。それでは「尽十方界是箇眞實人体」、「生死去來眞實人体」そして生死去來の「全機現」を本文に添つて追跡し、身學道を検討してみよう。

# (1) 尽十方界眞實人体

イ 盡十方世界といふは、十方面ともに盡界なり。東西南北四維上下を十方といふ。かの表裏縱横の究盡なる時節

を思量すべし。思量するといふは、人體はたとひ自他に罣礙せらるるといふとも、盡十方なりと諦觀し、決定するなり。これ未曾聞をきくなり。方等なるゆゑに。界等なるゆゑに。人體は四大五蘊なり。大塵ともに凡夫の究盡するところにあらず、聖者の參究するところなり。<sup>(20)</sup>

(意訳 尽十方世界というのは、東西南北、北西南西北東南東、上下の十方がそれぞれ世界を尽くしており、その十方の表裏、縦横を究めつくしている言葉であると思量すべきである。思量するといへば、この人体は自と他に區別されるが、尽十方だと明らか決定するのである。これはまだ聞いたことのないことを聞くというものである。このように十方の一々の方処が一切の十方界と平等で、十方界の一々の界処が一切の十方界と平等で、方の外に界の外に何物もなく余物がない。そして人体もまた四大(地水火風)五蘊(色受想行識)の仮の和合体である。その四大五蘊や外界の対象である六塵(色声香味触法)もそれぞれが眞実人体で、凡夫の究め尽くすところではなく、ただ聖者だけがよく究めいたところである。)

ロ 又、一塵に十方を諦觀すべし、十方は一塵に囊括するにあらず。あるいは一塵に僧堂・佛殿を建立し、あるいは僧堂・佛殿に盡界を建立せり。これより建立せり、建立これよりなり。恁麼の道理、すなはち盡十方界眞實人體なり。自然天然の邪見をならふべからず。<sup>(21)</sup>

(意訳 またその一つに十方を明らかにすべきである。それはその一つに十方を包みこみおしこめるのではない。つまり一つのなかに僧堂、仏殿を建立し、僧堂、仏殿のなかに尽界を建立しているということである。僧堂、仏殿を建立することも、僧堂、仏殿のなかに建立することも、その建立は学道からそうなるのである。その道理が、尽十方界が眞実人体であるということである。自然天然の外道の誤った見解にならってはいけない。)

ハ 界量にあらざれば廣狹にあらず。盡十方界は八萬四千の說法蘊せつぽうなり、八萬四千の三昧さんまいなり、八萬四千の陀羅尼だらになり。八萬四千の說法蘊、これ轉法輪なるがゆゑに。法輪の轉處くわんちは、互界くわんかいなり、互時くわんじなり。方域なきにあらず、眞實人體なり。いまのなんぢ、いまのわれ、盡十方界眞實人體なる人なり。これらを蹉過しゃくわすることなく學道するなり。<sup>(22)</sup>

(意訳 尽十方界は外界の量の問題ではない、したがって広狭のことでもない。それは八万四千のありとあらゆる説法のあつまりである。つまり八万四千の三昧であり、八万四千の陀羅尼である。八万四千の説法のあつまりとは、法輪を転ずることであり、その法輪を転ずる処は、世界全体にわたり、また、過去現在未來すべての時にわたる。それだからといって方向、領域がないわけでもない。それこそ眞實人体である。だからいまのこの汝いまのこの我もともに尽十方界なる眞實人体の人である。そこを間違いないように學道するのである。)

ニ たとひ三大阿僧祇劫、十三大阿僧祇劫、無量阿僧祇劫までも、捨身受身しもてゆく、かならず學道の時節なる、進歩退歩學道なり。禮拜問訊する、すなはち勸止威儀なり。枯木を畫圖わづし、死灰を磨甄ませんす、しばらく閑斷けんだんあらず、曆日は短促たんそくなりといへども、學道は幽遠いうえんなり。捨家出家せる風流、たとひ蕭然せうぜんなりとも、樵夫せうふに混同することなかれ。活計かつけいたとひ競頭きんとうすとも、佃戸てんこに一齊なるにあらず。迷悟善惡の論に比することなかれ、邪正眞偽(23)の際きはにとどむることなかれ。

(意訳 三大阿僧祇劫とか十三大阿僧祇劫とか無量阿僧祇劫といわれる限りない時間に、あるいは身を捨てあるいは身を受けていく、そこには一進一退の學道があるが、學道の時節でないところはない。そうであればその學道は、師を礼し問いを發する一々が學道の作法である。枯木、死灰は二乗の學道であり、磨甄は禪的な學道であ

るが、その枯木をえがき、死灰を磨き出すこともある。それも間断ない学道である。曆日は無常迅速であるが、学道は幽遠である。家を捨てて出家するすがたは静寂そのものであるが、これを以て樵夫山棲の寂漠と混同してはならない。何故かというに出家のすがたは内に活動的なものがあるからである。しかしまた活動的であるといっても、田畑を耕す農夫の活動と同じではない。そこではもはや迷いや悟り、善だ悪だの議論ではなく、邪正や真偽の分際ではなく、それらを超えているのである。)

## (2) 生死去来眞実人体

生死去来眞実人体といふは、いはゆる生死は凡夫の流轉なりといへども、大聖の所脱なり。超凡越聖せん、これを眞實體とするのみにあらず。これに二種七種のしなあれど、究盡するに、面みな生死なるゆゑに恐怖すべきにあらず。ゆゑいかんとなれば、いまだ生をすてざれども、いますでに死をみる。いまだ死をすてざれども、いますでに生をみる。生は死を罣礙するにあらず、死は生を罣礙するにあらず。生死ともに凡夫のしるところにあらず。生は栢樹子のごとし死は鐵漢のごとし。栢樹はたとひ栢樹に礙せらるゝも、生はいまだ死に礙せられざるゆゑに學道なり。生は一枚にあらず。死は兩足にあらず。死の生に相對するなし、生の死に相待するなし。

(意識 生死去来が眞実人体であるというのは、どういう意味かというに、いわゆる生死は凡夫にとっては流轉するすがたであるが、それがそのまま聖者にとっては解脱しているところである。したがってそれは凡夫と聖者の區別を越えている、だから眞実人体というのである。しかしそれだけでなく、生死流轉のなかにあつての学道もまた眞実人体である。生死にも二種、七種と色々の生死があるが、畢竟するにそれらの一々面々が大聖所脱の生死であるから、必ずしも恐怖すべきものではない。何故かというに、人はまだ生を捨てないのに、すでに死を

経験している、まだ死を捨てないのに、すでに生を経験している。このように生は決して死をさまたげるものではなく、死もまた生をさまたげるものではない。生死は凡夫の生死でありながら、その生死の真相は凡夫の知りうるところではない。生は全天地を尽くした庭前の柏の木のようなものであり、死は全法界を究めた不動の偉丈夫のようなものである。柏の木はたとい柏の木にさまたげられることがあるとも、生は決して死にさまたげられることはないのであるから、学道なのである。したがって生は生きりで、一枚二枚の一枚でない。死もまた死だけで一匹二匹の二匹ではない。死は生に相對するのでも、生が死と相對するのでもない。〕

### (3) 生死去來の全機現

圓悟禪師えんごぜんしいはく、生也全機現、死也全機現、閻塞えんさい太虛空たいこくくう、赤心常しやくしんじょう片片ぺんぺん。

この道著だうしやく、しづかに功夫點檢くふてんけんすべし、圓悟禪師えんごぜんしかつて恁麼にんまいふといへども、なほいまだ生死の全機にあらまれることをしらず。去來を參學するに、去に生死あり、來に生死あり。生に去來あり、死に去來あり、去來は盡十方界を兩翼三翼として飛去飛來ひこひらいす、盡十方界を三足五足として進歩退歩するなり。生死を頭尾として、盡十方界眞實人體はよく翻身回腦へんしんくわいなんするなり。翻身回腦するに、如一錢大ひとえだなり、似微塵裏じみちんりなり。平坦坦地、それ壁立千仞へきりつせんなり。壁立千仞處、それ平坦坦地なり。このゆゑに、南州北州の面目あり、これを檢して學道す。非想非非想の骨髄あり、これを抗して學道するのみなり。<sup>(25)</sup>

(意訳) 圓悟禪師がいわれた。生はそのはたらき全体が現われている、死もまたその全体のはたらきが現われている。生も死もそれぞれ大いなる虛空に充足していて、全虛空が生であり死である、いやその時は大虛空もない。強いていえば一念一念が常に皆あらわである、と。

この言葉を静かに思いめぐらして検討してみるがよい。圓悟禪師はかつてこのようにいったが、禪師は生死が大虚空に充足しているどころか、さらにそれを溢れるものだということを知らなかったものではあるまいか。去来ということを考えてみるに、去にも生死があり、来にも生死があり、さらに生にも去来があり、死にも去来がある。生死去来はそれぞれ他の三をさまたげない。去来は尽十方界を翼として飛び去り飛び来るのであり、尽十方界を足として一進一退するのである。その尽十方界の眞実人体は生死を頭として尾として、身を翻し脳をめぐらすように轉身自在である。それはどこまでも大きく、どこまでも小さい、微塵のうちにも入る。あるいはまた坦々たる平地かと思えば千仞の絶壁であり、千仞の絶壁かと思えば坦々たる平地である。高下昇降自在である。そこに南瞻部洲、北俱盧洲の面目がある。ここをよく検討して学道するのである。またこれら下界の二洲に対して無色界最高處の非想非非想の面目があるが、これをとり上げて学道するのである。南洲北洲の面目も眞実人体、非想非非想の骨髓も眞実人体である。）

以上身学道をその展開として(1)「尽十方界眞実人体」と(2)「生死去来眞実人体」さらに(3)「生死去来の全機現」に分けて、本文に沿うて見てきた。それによると、「尽十方界眞実人体」においては、十方は東西南北、四維上下の十方乃至その表裏縦横と分別されるが、その一々の方處、界處が十方を尽くしている。人体も自他乃至四大、五蘊と分別されるが、それらはそのまま眞実人体として十方界を尽くしている、「十方面ともに盡界なり」である(イ)、ロにおいては、一塵(小)と十方(大)の対立区別は超克されて、それは一塵の中に十方が包括されるというのではない。實に一塵に僧堂仏殿が建立され、いや僧堂仏殿に尽界が建立されるのである。そのことは学道からそうなるのである、その道理が尽十方界眞実人体ということである、とされる。ハにおいては、尽十方界は八万四千の説法蘊と

して再び数量的にとりあげられるが、八万四千の説法蘊は転法輪であり、その場所は世界全体また過現末の全時間にわたる。しかしその方向領域がない訳ではないとして、しかもそれぞれの場所それぞれの時間の一つが真人人体であるという。二においては、無限の時間の一つに捨身受身の学道のあること、したがってその一つは具体的な姿とり、礼拝問訊、枯木、死灰や磨甄といった学道があるが、それらはそれぞれに眞実の学道である。ここでも礼拝問訊という師と弟子、枯木死灰と磨甄という小乗大乘の分別対立があるが、それらはそれぞれに意味をもつ。迷悟や善悪、邪正や眞偽の分別ではないのであって、それらを超えている、というのである。こうしてみれば、尽十方界が真人人体であるとは要するにその十方の一つが独立無伴の絶対的存在、価値的には絶対価値が付与されているということであらう。

次に(2)「生死去来真人人体」であるが、生死は一方(凡夫)においては流転であるが、他方(聖者)においては解脱である。また二種七種と種々の生死があるが、その一つがまた解脱である。ところで生と死とは互いに罣礙するところがないのである。それというのも生は生きりで全天地ただ生のみであり、死も同様死きりで乾坤ただ死のみであるからである。このように生死は相対でないとすれば、つまり真人人体上の生死であるとすれば、ここでも生と死の一法究尽の消息ということになると思われる。こうして最後に(3)に圓悟禪師の「生也全機現、死也全機現」の拈提となる。生死の全機現はいうまでもなく一法究尽のかたちであらう。生に去来、死に去来、去に生死、来に生死があるというのであるからである。生死去来ともに赤心片片である。しかもその生死去来が尽十方界を飛去飛来し翻身回腦する有様は平坦地、壁立千仞処、南洲北洲、非想非非想処と自由無礙である。それこそ尽十方界真人人体ということである、と解せられるのである。

こうしてみれば、身学道は一法究尽、全機現成を説いておると考えられ、その限り例えば従来の住法位(薪

は新の法位に住し、―天福元年の『現在公案』―と径庭あると思われない。『如浄禅师語録』の到来による影響殊にそれによる思想の変化変更を認めることができないといふべきではあるまいか。

『身心學道』は見てきたように、心學道と身學道の二方面から論ぜられており、そしてそれぞれの一法究尽が根本と考えられるが、心と身と並べられる時、身心學道の呼称からも、また心を論じ身を論ずるその論述の順序からいって「心よりはむしろ身の重要なことを示している」と読むこともできよう。そうであれば『如浄禅师語録』の「心塵脱落」の問題にとってそれは看過できない。「心塵」に対して「身心」だからである。しかしその関係は、これまで見て来た限り具体的に明白にすることができない。やはり思想の根幹において道元に変化はなかったとここではすべきであると考え。何故かというに、道元にとって各別思想の相對ながらその一々の究尽、絶対価値をもつことが重要であったと解せられ、その限り極言すれば、身心といつてもそれを相對とみれば生死、去来乃至迷悟、修証等々といいかえても別に意味の違いはないともいえるからである。

ただここで、すなわち『身心學道』に「脱落」といふ言葉が見え、またその個所に『如浄禅师語録』到来の折の道元の上堂法語に見える「跣跳」といふ言葉があらわれていることである。それを検討してみよう。その個所は次の通りである。

百丈大智禪師のいはく、若執<sup>シセ</sup>本清浄本解説<sup>ニ</sup>自是仏、自是禪道解<sup>ニ</sup>者、即屬<sup>ニ</sup>自然外道<sup>ニ</sup>。

これら閑家の破具にあらず、學道の積功累徳<sup>シヤクムルイ</sup>なり。跣跳<sup>ハツテ</sup>して玲瓏<sup>リンロン</sup>八面なり、脱落<sup>トウラク</sup>して如藤倚樹<sup>ニ</sup>なり。或現此身得度而爲說法なり、或現他身得度而爲說法なり。或不現此身得度而爲說法なり、或不現他身得度而爲說法なり。乃至不爲說法<sup>27</sup>なり。

それは、「人は本来清浄でもともと解脱しているものであって、したがっておのずから仏であるとかそれがおのずから禅道なのだといった見解に執着する者があれば、それは自然外道に属することになる」という百丈大智禪師の言葉は、人のいない家の破れ道具ではなく、学道を積みかさねてきた功德というものである。その有様が「跏趺して玲瓏八面なり、脱落して如藤倚樹なり」というのである。『聞解』はこれを註して、「跏趺して一切の法中をおどり出て不藏、玲瓏と照り透りて本解脱等と執著する邪見を脱落して、法の血脈不斷なることは、藤の樹に依ることく、法と法と相依って居る……」<sup>(28)</sup>としている。そうであれば「脱落」は「執著する邪見を脱落する」の意で、煩惱脱落の「心塵脱落」と解することも可能である。執著することこそ邪見、煩惱であるからである。しかし「心塵脱落」と必ずしも重ねなければならぬこともない。ここは「学道の積功累徳」を強調するのであるからである。『私記』は「いはゆる宗旨は、学道は、一事一物餘事なきをもて、外學の兩楹の間に超越するがごときにはあらざるなり、ゆゑに喫飯時作麼生といひ、舉足下足無非鳥道といふ、あに跏趺脱落にあらざらんや、ここをもて或現或不現乃至不爲說法なりといへり、これらみなかくれずあらはれたる眞實學道の修證に染汚なきなり」<sup>(29)</sup>と註している。跏趺脱落は眞實学道の修證に染汚ないことというのである。そうしてみればこの脱落は「心塵脱落」を特に考慮してのものではないといつてよいのではあるまいか。

次に「跏趺」であるが、ここでは「一切の法中をおどり出て不藏」かくれずあらわれているの意である。ところで『如浄禅師語録』到来の折の道元の上堂法語にあらわれる句は「箇是天童打跏趺、踏翻東海竜魚驚」である。しかしこの両者を結びつけることも困難を覚える。確かに如浄(天童)は一切法中を魚のはねるように飛び出た古仏であり、只管打坐に徹した眞實の学道の人である。しかしここでは特別の関係を求めることは難しい。ただここでは増谷文雄氏の次の言葉を挙げるだけである。「……この『身心学道』の巻は、その語録到来ののちの最初制作である…

…むろん、この一卷のなかには、別に際立ってその影を投じているわけではない。おそらくは、この一卷の構想は、その到来の以前になつていたものにちがひあるまい。東海の竜魚の驚愕がその果を結ぶためには、なお藉すにもっと時をもつてしなければならぬであろう。ただ、このころより以後しだいにあらわとなつてくる道元の内的展開を理解するためには、この東海の竜魚のおどろきと目覚めは、その不可欠の要素であることを、ここにはっきりと言及しておかねばなるまい。<sup>(30)</sup>

## 注

- 1 大久保道舟編『道元禪師全集』上巻、三八頁。
- 2 『正法眼蔵註解全書』第五巻、三四一頁。
- 3 同上、三四五頁。
- 4 前掲『道元禪師全集』上巻、三八頁。
- 5、6 前掲『正法眼蔵註解全書』第五巻、三四五頁。
- 7 前掲『道元禪師全集』上巻、三八―九頁。
- 8 前掲『正法眼蔵註解全書』第五巻、三四六頁。
- 9 前掲『道元禪師全集』上巻、三九頁。
- 10 同上、七七頁。
- 11 同上、七七二頁。
- 12 同上、五六―七頁。
- 13 岡田宜法著『正法眼蔵思想大系』第三巻、一一二頁。
- 14 前掲『道元禪師全集』上巻、三二―一二頁。
- 15 同上、三九頁。
- 16 前掲『正法眼蔵思想大系』第三巻、二九三頁。
- 17 西有穆山提唱 富山祖英書  
博林庵堂編『正法眼蔵啓迪』(大法輪閣発行)下巻、二七〇頁。
- 18 前掲『道元禪師全集』上巻、三九頁。
- 19 同上
- 20、21、22、23 同上、四〇頁。
- 24 同上、四〇―一頁。
- 25 同上、四一頁。
- 26 玉木康四郎著『道元』(中央公論社、日本の名著7)、三三二頁。
- 27 前掲『道元禪師全集』上巻、三九頁。

- 30 28 前掲『正法眼藏註解全書』第五卷、三五四頁。  
増谷文雄著『現代語訳 正法眼藏』第四卷、一三三頁。 29 同上。